◇ 国　語

国 3－1～国 3－17 まで 17 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

対話をめぐる基礎考察の最後に、改めて対話、つまりディアロゴス(注一)のコンカン[A]にある言葉、ロゴスについて考えます。言葉とはどういうものか、私たち人間はなぜ言葉を発するのかという問題です。三つのポイントがあります。言葉は伝達の道具ではなく思考そのものだということ、言葉は現実を形作ること、そして、言葉は相手に発することで成り立つことです。一つずつ見ていきましょう。

私たちは通常、心の中にある考えを、言葉という手段で相手に伝えると思っています。しかし、その見方は言葉のホンショウ[B]を捉え損なっています。まず、考えがあってそれを言葉にして運ぶのではなく、私たちはそもそも言葉で考えているのです。心の中でもやもやしたなにかを言葉にまとめるには、たしかにステップが必要ですが、考えは言葉とはけっして独立に存在するものではありません。しかも、言葉があってなにかを人に伝えるのではなくて、そもそも言葉を発すること自体が伝達となっているのです。(二)言葉を道具だというのはまったく不正確で、言葉そのものがすべての事態を成立させているはずです。

第二に、言葉はたんになにかを映し取ったり、記述して情報を伝えたりするものではありません。言葉は現実を作り、変えていきます。もっと言うと、言葉を語る人、語られた相手のあり方を変えていくものです。典型的には、「私はあなたが好きです」や「結婚しましょう」といった発言は、たんに私の心のあり方を表示するのではなく、この発言によって二人の現実を新たに作る行為なのです。哲学で「言語行為（スピーチ・アクト）」と呼ばれる語りの遂行は、けっして特殊な言葉のあり方ではありません。正しい人、信頼できる人、人のあり方は、自分と他者がどう言葉を語っていくかで形作られるはずです。

第三に、言葉はだれかが一人で発するものではなく、聞く相手がいてその人に向けて発せられるものです。つまり、言葉は最初から対話的なものだと言えるでしょう。私一人だけの言葉というものは、実は存在しません。つまり、言葉は語り聞くという［ア］なものとして成り立っているので、言葉があるから対話が成り立つのではなく、そもそも言葉が対話的だと言えるのです。

私が今こうやって言葉を発するのは、皆さんが読み聴いてくださるからであり、私もそれを前提にしています。対話の方が先行するのです。誰もいないところで自分一人の頭の中で思考しているとして、それも言葉だと思われるかもしれませんが、それは自分と交わす対話です。つまり、思考は、言葉を自分の内に向けて発する二次的な対話なのです。相手に向けるのではない言葉、なにかを作り出すことを目指さない言葉は、言葉の役割を果たすことはありません。

以上の三点を念頭において、対話が何を目指しているのかを考えてみましょう。

まず対話はなにかすでにあるメッセージや情報を相手に伝えるものではありません。言葉を語ることはそれをつうじて思考していくことであり、二人で言葉を交わすことは一緒に考えていくことです。したがって、対話の目標は、特定の主題についてお互いに知恵を出し合って考えを進めていくことにあります。たとえば、「正義とは何か」「これこれの行為は正しいのか」、そういった問いを発してこの主題について(a)顔を突き合わせて議論していくのです。

その対話が目指すところは、まずは合意にあると言えるかもしれません。しかし、政治家の対話ではありませんので、双方がどこか(c)ダキョウして協定を結ぶということが目指されているわけではありません。一つの結論が得られ、二人がそれで納得して決着することは、あればより良いかもしれませんが、必ずしも最終地点として設定させるべきではないでしょう。合意ができなかったら対話は成立しなかった、無駄だったと言うべきではないからです。合意ができなかったということも、一つの立派な対話の結果だったはずです。

しかし、これはなかなか微妙な問題です。はじめから合意など目指さないと開き直ってしまっては、対話は始まりません。つまり、目標地点のない対話は、たんなる会話やおしゃべりになりかねません。反対に、完全に合意して二人の意見が一致してしまったら、対話はそれ以上必要ありません。あえて言えば、(ニ)そこに至らないギリギリのところが目指されるのかもしれないのです。結局対話とは何かと言うと、同じ言葉について論じ尽くしてお互いにできる限り理解する、そのなかで自分の立場を形作ったり再検討したりしてさらに主張していく。そのあたりが期待される結果なのではないでしょうか。合意や理解は、二人の思いが限りなく一つに重なる地点ですが、それはあくまで理想の［　イ　］です。

対話が論じ尽くすことを目指す時、二人はある共通のものを目指しているはずです。言葉を交わす人たちがまったく別の方向を向いていたり、そもそも同じ方向など見ることができないと考えていたら、やはり対話は成立しません。そのなにかが、真理と呼ばれるものです。一つの真理を目指すなど危険だ、幻想だという意見をよく聞きます。しかし、真理とは私たちが同じ言葉を使いながら一緒に考えること、この対話を可能にする、いわば場の成立根拠です。一つの共通の場が成立していないところでは、一緒に生きることすらできません。その場を照らし出す光のようなものが、真理と呼ばれてきたものなのでしょう。

(注二) ソクラテスがいつも対話を始める際に語っていたように、「私はこのことを知らない。だからあなたと一緒に議論したいのだ」という姿勢が、対話には何よりも大切です。対話は相手になにかを教えてあげることでも、自分がなにかを得ることでもありません。もっと言うと、(三)対話する人は失うべきものは何一つもっていない。だから、真理に向けて一所懸命に言葉を交わしていくのです。一緒に対話をしていくこと、それ自体が人間の義務であり、生きがいであり幸福なのだと私は考えます。私たちが対話を生かすというより、対話が私たちを生かしてくれているからです。

「知らない」「分からない」とはどういうことでしょう。通常私たちは、なんらか知っている。はっきりと言葉にしていなくても、すぐに説明できるはずだと信じています。ですが、対話による問題をつうじて明らかになるのは、それが思い込みに過ぎないという事態です。言葉できちんと言えないにもかかわらず、知っているというのは誤りです。証明が与えられないのにその定理を知っていると主張したり、理由が説明できないのに(b)学説を知っていると言うようなものです。

対話は、その主題についてある程度は分かっていると思っていた対話者の思い込みを、思いがけないかたちで破壊します。それが対話の最大の効果なのです。対話の成果は結論や合意や知識をもたらすというより、思い込みを壊して私たちを無にするという、破壊的なものです。それに付き合う真面目さが要求されます。

真理を目指す対話は、けっして全体主義的なものではありません。対話はカ(D)クイツ的な考えの押し付けになることはなく、むしろまったく新しい考えや見方を私たちにもたしてくれます。もしもどちらかが自分の考えを相手に強制するとしたら、それはもはや対話ではなく説得か強要です。それを拒否する自由な精神が、初めて真理を目指すことができるはずです。対話は自立し

た個人の間で初めて成立するものだからです。

言葉が現実と私たちのあり方を作り出すように、真理に向けて言葉を投げかけることで、私たちは今のあり方を超えていくのです。クリエイティヴィティ、創造性という言葉はよく聞きますが、対話がもたらす制作こそがその［ウ］はずです。では、創り出すとは何でしょう。

あなたが私と対話で言葉を交わしていくなかで、はじめはどちらも思いもかけていなかった考え方が生み出されます。そこに生まれた言葉は、どちらかが最初から持っていた考えではありません。また、それはどちらか一方が他方に提示したものというより、二人の間で生まれ出たものではないでしょうか。さらに言うと、言葉を新たな子供として生み出したのは、私たちが行っている対話なのです。対話から生まれる言葉は、どちらか一方では作り出せないものです。それは二人のものですらなく、二人から離れて自立した、新たな生命をもって生きていく言葉なのです。

それは、とりわけ書き残され、読み継がれることで、普遍性を手に入れ永遠の命をヤド[E]します。(四) 対話こそ、私たち有限な人間が永遠という次元に関わる瞬間なのです。

（納富信留『対話の技法』による）

（注一）ディアロゴス、ロゴス　……ギリシア語。ロゴスは言葉のこと。ディアロゴスは対話のこと。

（注二）ソクラテス　……古代ギリシアの哲学者。人と対話しつつ思想を深化させたといわれる。

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　コンカン

①論文をカンリャク化し要旨を示す　②実行委員会のカンブに選出される
③作家の見事な文章にカンプクする　④彼の過ちをカンヨウな態度で許す
⑤会場はカンキの渦に包まれている

1

B　ホンショウ

①あの子とはアイショウが良い　②最後の試合で完全ネンショウする
③アイドルのイショウを制作する　④一切のショウトリヒキを停止する
⑤王様のショウゾウを部屋に飾る

2

C　ダキョウ

①夏休みに入りダセイ的に日を送る　②不自由のない暮らしは人をダラクさせる
③近所のダガシ屋に子どもが集まる　④野球選手はトウダにわたって活躍する
⑤君の判断は極めてダトウだ

3

D　カクイツ

①カクベツに新しい論文のテーマ　②新事業にぜひサンカクしたい
③フカクにも油断してしまった　④会社のチュウカクを担う人々
⑤新首相がナイカクを組織した

4

E　ヤド（す）

①チームのシュクショウ会に参加する　②授業中はセイシュクにしてください
③氷河の総面積はシュクショウしている　④かつて栄えたシュクバマチをたずねる
⑤祖母のようなシュクジョにあこがれる

5

問二　空欄［ア］・［イ］・［ウ］に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

［ア］　①感情的　②相互的　③対照的　④客観的　⑤派生的　［6］

［イ］　①沸点　②盲点　③力点　④起点　⑤焦点　［7］

［ウ］　①身を削る　②場をしのぐ　③名に値する　④顔を立てる　⑤責めをふさぐ　［8］

問三　傍線部（a）・（b）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）顔を突き合わせ（る）　①質問すること　②心から親しむこと　③批判も避けないこと　④本音を話すこと　⑤対面すること　［9］

（b）学説　①研究者が自分自身の見解をまとめて公刊した書籍　②公正で厳密な実験により証明された客観的な事実　③研究に基づいて独自にまとめられた学問上の考え　④権威ある新聞や雑誌などに掲載された名士の論説　⑤なるべく多くの人の考えを集約してまとめた公論　［10］

問四　傍線部（一）「言葉を道具だ」というのは、どのようなことか。その内容を説明したもので、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

11

①私たちはあるものごとを言葉を使って考えているということ
②言葉を発すること自体が現実の在り様を形作っているということ
③言葉では自分の考えを正確に表現することができないということ
④自分のなかに存在する考えを言葉が相手に運んでくれるということ

問五　傍線部（二）（対話では）「そこに至らないギリギリのところが目指されるのかもしれない」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したもので、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

12

①二人が合意することは、それ以上の対話を停止させ相互理解や自分の立場の再検討をはばむ可能性があるから
②合意を目標としてしまうと、それができなかったときにそれまでの対話がまったく無駄に終わってしまうから
③合意することを目指してしまうと、双方の言葉が暴力的になり対話自体が激しいものとなる可能性があるから
④互いに納得して話し合いを終えるには、自然な会話やおしゃべりのなかでなされた合意の方が価値があるから

問六　傍線部（三）「対話する人は失うべきものは何一つもっていない」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したもので、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

13

①対話するときには自分の知っていることはすべて話そうという決意が大事だから
②対話する際にはまず「私はこのことを知らない」と考える姿勢が必要になるから
③対話には「分からないから教えてほしい」と相手に自分を委ねる気持ちが必要だから
④真理に向けて一生懸命に対話するときには何かを持っているという自意識は無用だから

問七　傍線部（四）「対話こそ、私たち有限な人間が永遠という次元に関わる瞬間」とあるが、これは具体的にどのようなことか。これに関連する内容を説明したもので、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

14

①対話から生まれた言葉は、社会における人々の評価とは関係なくそれ自体が価値を持って存在し続けるということ
②対話から生まれた言葉は、芸術作品とおなじようにその魅力や力強さによって多くの人々に影響を与えていくということ
③対話から生まれた言葉は、対話者二人によって共同的に作り出されたもので、二人の記憶に末長く残り続けるということ
④対話から生まれた言葉は、私たちが一つの真理を目指した記録として、永遠に残り続ける可能性があるということ

問八　本文の内容と一致しないものはどれか。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。

①対話は私たちがすでに持っていた思い込みを破壊してしまうことがある
②対話により私たちの認識を更新したり自身を新たに生かすこともできる
③対話は時にどちらかの考えを相手に強制するきっかけになることがある
④対話において合意できなかったとしてもそれも立派な対話の結果である

15

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「いまの日本には楽しみがあふれているのに、楽しみ方が下手だ」

谷川俊太郎の『「ん」まであるく』（草思社）というエッセイ集のなかにある言葉だ。

たしかに、余暇というと多くの人が、ゴルフに行く、家族でディズニーランドに出かける、ショッピングセンターに買物に行き、ついでにそこで食事もする、というかたちで時を過ごす。それが悪い、と言うのではない。しかし、あらかじめ用意された場所や装置がないと、時間がつぶせないというのでは、「楽しみ方が下手」と言われても仕方がないだろう。

このことを、もう少し、谷川の文章に沿って考えてみたい。続けて、こんなふうに言う。

「文学、芸術に関する限り、私たちは楽しさよりも先ず、何かしら(一)〈ためになること〉を追うようだ。楽しむための文学を、たとえば中間小説、大衆小説などと呼んで区別するところにも、自らの手で楽しむことを卑小化する傾向が見られはしまいか。感覚の楽しみが精神の豊かさにつながっていないから、楽しさを究極の評価とし得ないのだ」

ここ数年のベストセラーリストを眺めていると、自己ケイハツ本がつねに上位を占めている傾向に気づく。多くの人がいまの自分に満足できず、なにかを変えたがっているようだ。スキルアップを図り、それを仕事に結びつけて出世したい。本もそのために「役立つ」なら読む。そういう気持ちが、リストから透けて見える。

出世を願う気持ちを否定することはできない。しかし、本一冊を読んで、いきなり自己を変革しようというのはあまりに安易だ。そして、なにか「ためになる」ことがないと、本に手を出さない姿勢も［ア］だ。それもこれも、「本を読む」ことのほんとうの楽しさを知らないから、いつまでたっても［イ］を謳う本ばかりに手を出してしまうのである。本は栄養ドリンクではない。

「楽しむことのできぬ精神はひよわだ。楽しむことを許さない文化は未熟だ。詩や文学を楽しめぬところに、今の私たちの現実生活の楽しみかたの底の浅さも表れていると思う」と、谷川は言う。また「楽しみはもっと孤独なものであろう」とも。

恋人と、あるいは大勢の仲間といっしょに音楽を聴いたり、映画を観たりするのは楽しい。しかし、その瞬間だって、その楽しさを腹の底から感じるのはいつだってひとりの自分なのだ。

いつも誰かといっしょでないと不安で仕方がない、ひとりでいるのはみじめ。だからスマホやSNSで他人とつながって生きている。こうして「孤独」という言葉を恐れるあまり、自分ひとりで感じることのできる力を［ウ］にしたらどうなるか。「ひとりじゃいられない病」にかかってしまい、いつの間にか、(二)伸び切ったゴムのように魂は弛緩してしまうだろう。

『『教養』とはつまるところ『自分ひとりでも時間をつぶせる』ということだ。それは［エ］にできることではない。働き蜂たちの最後の闘いは、ボウダイな時間との孤独な闘いである」

そう書いたのは中島らも（『固いおとうふ』双葉文庫）。「教養」という、うさんくさく実体のない言葉を、なんとうまく表現していることだろう。

「自分ひとりでもうまく時間をつぶせる」人のことを、「孤独な人」とは言わない。なぜなら、その人の時間はきわめて充実しているからだ。私はつまるところ、「孤独」を克服し、たったひとりで自分の内面を深めるのは「読書」以外にない、と考えている。

また谷川は前掲書のなかで、自分だけが感じる「楽しさ」をちゃんと見つめることが「成熟」だと言っている。中島らもの意見と重なるところが大きいことがわかるだろう。

基本的に読書は、ひとりでするものだ。その意味で読書は、「自分が感じる『楽しさ』をちゃんと見つめる」ことにもっとも適した行為だと思う。そして読書を通して、孤独のなかで楽しみを知る能力をキタえることができる。だからこそ、(三)読書の習慣のある人は、他人の孤独も理解することができるのだ。

孤独なんかこわくない。「読書の楽しみ」を知っている者なら、いつだって胸を張って言えるはずだ。

読書の楽しみを知って、その経験が積み重なり、一つの生活スタイルとして定着すると、自然に何かが変わっていくのではな

いだろうか。

宮崎駿（はやお）脚本・プロデュースによるスタジオジブリ作品『耳をすませば』（近藤喜文監督）には、本が好きな中学生の少女が出てくる。名前は月島雫（しずく）。彼女が学校の図書館で借りる本の図書カードにはいつも同じ名前がある、というところから物語が発展していく。

雫の父親・靖也の仕事は、市の図書館司書。というわけで、本がたくさん登場するアニメなのだが、宮崎駿は靖也役の声に思い切った配役をした。なんと、評論家の立花隆に白羽の矢を立てたのだ。もちろん立花には声優の経験などない。どころか、たまにテレビに出ているのを見るかぎり、どう考えても、決められたセリフを器用にこなせるとは思えない。事実、「彼の声優としての才能に関しては賛否両論がある」と、インターネットの事典「ウィキペディア」には書いてあった。こういう場合「賛否両論」と書かれているなら、「否」の声のほうが強かったと考えていい。もし「賛」の声が強いなら、「多くの賞賛を集めた」と書かれるからだ。

(b)ナれた俳優や本職の声優を避けて、ずぶの素人を使うことは冒険だったはず。それでも立花隆を起用した理由について宮崎は、うろ覚えだが「司書というたくさんの本を扱う仕事をしている人の役には、たくさん本を読んでいる人を使いたかった」と説明していたと思う。私はそれを聞いたとき、立花の声優としての能力は別にして、「なるほどなあ」と感心した。本をたくさん扱って、読んだ人には、それが特性として声にもなんらかのかたちで表れるだろうと。

実際のところ、声優・立花隆が演じる図書館司書は、私が見るかぎり悪くなかった。なるほど、セリフはやや平板で、ときとして妙な訛（なま）りがあるようにも聞こえたが、娘に優しい父親ぶりをリアルに表現できていたと思う。少なくとも、プロの声優にはない味があった。

そこで考えた。本をたくさん読んだ人の「声」というものがもしあるとしたら、それは「顔」にも表れるだろうか、と。

私は、書店から自著へのサインを求められるとき、そこに作家の似顔絵を(c)ソえることにしている。そのため、私は作家の顔写

真を人一倍数多く目にしている。その経験から言うと、作家はみな、それぞれいい顔なんだな、これが。ここでは男性作家に限るが、俳優やタレントの美醜の基準とは違った、別の基準での「いい顔」が存在することがよくわかる。

たとえば、加藤周一、中村真一郎、福永武彦の三人。いずれも戦後文学を支えた知の巨人たちで、和漢洋といずれの文学にも精通した本読みとしても知られる。三人とも美男子というわけではない。しかし、共通するのは、年を経るにしたがってだんだん風貌に深みが加わっていることだ。とくに加藤周一など、若い頃は鋭い眼光が研いだばかりのナイフのようで、触れれば傷つけられるような禍々(まがまが)しさを感じたが、髪が白くなり、顔のあちこちにしわが刻まれるようになった晩年は、眼の力はそのままに、いちばんいい顔をしていたように思う。たくさん本を読んできた、という履歴が顔に表れているのだ。つけ加えておくが、彼らは若い時分、女性にはモテた。

若い頃「水もしたたるイイ男」としてもてはやされた歌手や俳優が、年をとるにしたがって容姿が劣化していった例はきわめて多い。歳月の積み重ねは、もっとも厳しい批評家だ。自分のルックスにうぬぼれて［　オ　］、馬齢(ばれい)を重ねただけの男は、歳月によって手痛いしっぺ返しを食らうのだ。

もちろん、本をたくさん読んだからといって、いい顔がつくれるという保証はない。私も責任は取れない。だが「知」の力が、男の顔にある種の魅力を与えることは、古今の読書家たちの顔ぶれを見るかぎり疑いの余地がない。読書の積み重ねによってつちかわれる「品」のようなものが、彼らの顔には表れている。

私なんか、その点まだまだ修業が足りない。カンレキを過ぎたあたりで、「おや、若い頃より、なんだかいい顔になったね」——そう言われる日を夢に見て、今夜もベッドで本を開く。

（岡崎武志「読書の腕前」による）

問一　傍線部A・B・Cと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　ケイハツ

①文化をケイショウする　②オンケイにあずかる　③大雨ケイホウ　④ゼッケイに息を呑む　⑤ケイモウ思想

16

B　ボウダイ

①海面がボウチョウする　②ボウセキ会社に勤める　③ボウカン対策を施す　④雑事にボウサツされる　⑤カンボウ長官の発言

17

C　カンレキ

①エイカンを手にする　②カンプキンをもらう　③古い本がサイカンされる　④息子をカンドウする　⑤熱烈カンゲイ

18

問二　傍線部（a）・（b）・（c）と同じ漢字をカタカナ部分に含むものを、次の各群①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）　キタえる

①ホッキョク点へ向かう　②日本刀をタンゾウする　③意思のソツウを図る　④科学的センリャクを採用する　⑤運動能力がイデンする

19

(b) ナれた

①ゲンカクに審査する　②コウレイの行事
③影響力をハッキする　④カンシュウに従う
⑤ゼツボウ的な気分になる

20

(c) ソえる

①作文をテンサクする　②エンカク地へ赴く
③不当にサクシュする　④ドウトク的な問題
⑤意図をスイサツする

21

問三　空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ ・ オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

①正当　②倫理的　③いびつ　④由々しさ　⑤当然

22

イ

①普遍性　②異常性　③即効性　④独善性　⑤優秀性

23

ウ

①ないがしろ　②信じるよう　③尊ぶこと　④唯一の手段　⑤たいせつ

24

エ

①呉越同舟　②晴耕雨読　③唯一無二　④一朝一夕　⑤本末転倒

25

オ

①自嘲して　②精進せず　③考えすぎ　④限定的に　⑤特殊化し

26

問四　傍線部（一）「〈ためになること〉」とは何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

①楽しむための文学を中間小説や大衆小説などと呼んで区別し、自らの手で楽しむことを卑小化すること。
②あらかじめ用意された場所や装置がないと時間がつぶせない、という現代人の生き方について考えること。
③感覚の楽しみを精神の豊かさにつなげ、楽しさを究極の評価とするような人生を生きること。
④大勢の仲間といっしょに音楽を聴いたり映画を観たりすることによって、その楽しさを腹の底から感じること。
⑤本を読むことで自己を変革したりスキルアップを図って、それを仕事に結びつけたりすること。

問五　傍線部（二）「伸び切ったゴムのように魂は弛緩（しかん）してしまう」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

28

①「知」の力が男の顔にある種の魅力を与えるようになり、古今の読書家たちの顔ぶれが変化してしまう。
②「孤独」を克服することができなくなり、自分の内面を深め、自分だけが感じる「楽しさ」を見つめることもなくなる。
③自分のルックスにうぬぼれて馬齢を重ねていくこともなくなり、歳月によって手痛いしっぺ返しを食らうこともなくなる。
④深い教養を顔に刻み込んで、俳優やタレントの美醜の基準とは違った、別の基準での「いい顔」が存在するようになる。
⑤自分ひとりでも時間をつぶすことができる働き蜂たちのように、孤独な闘いを強いられることになる。

問六　傍線部（三）「読書の習慣のある人は、他人の孤独も理解することができる」のはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。　29

①自分だけが感じる「楽しさ」をちゃんと見つめることが、「孤独」につながると考えられるから。
②本をたくさん読んだ人の「声」というものがもしあるとしたら、それは魂の「孤独」を訴える声であるはずだから。
③誰かといっしょでないと不安だが、スマホやＳＮＳがあれば他人とつながって生きていけるから。
④本をたくさん読み「孤独」を理解しても、「知」の力が男の顔にある種の魅力を与えるとは考えられないから。
⑤読書を通して自分の内面を深め「孤独」を克服することが、他人の「孤独」に対する深い理解にもつながるから。

問七　本文の内容にあてはまるのはどれか。最も適当なものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。　30・31

①俳優やタレントの美醜の基準は、歳月の積み重ねというもっとも厳しい批評にさらされることによって、手痛いしっぺ返しを食らうものである。
②声優の経験などなくても、本をたくさん読んでいるだけで、決められたセリフを器用にこなし、優しい父親ぶりをリアルに表現できるはずである。
③本は何かに役立てるために読むのではなく、たったひとりで自分の内面を深めるために読むべきであって、それによって人は「孤独」を克服することもできる。
④人は年をとるにしたがって容姿が劣化し髪が白くなり顔のあちこちにしわが刻まれるのだが、その風貌によって文学に精通した本読みとして世間に知られるようになる。
⑤あらかじめ用意された場所や装置がないと時間がつぶせないような「楽しみ方が下手」な人は、「ためになる」読書を心がけるべきである。
⑥年とともに人の風貌に深みが加わっていく場合があるが、それは読書の積み重ねによって「知」の力が蓄積され、「品」のようなものが顔に表れることがあるからだ。
⑦基本的に読書はひとりでするものゆえに、人生の孤独な闘いを乗り切るためにも、本をたくさん読んで「知」の力を変化させていかねばならない。